

「ハナ」の政治学：梁石日『夜を賭けて』論

林, 相珉
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/15101>

出版情報：九大日文. 12, pp.59-77, 2008-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

「ハナ」の政治学

——梁石日『夜を賭けて』論——

林 相 珉
[LIM SEUNG-MIN]

I はじめに——二つのアパッチ

戦後十三年の一九五八年、敗戦一日前の一九四五年八月十四日にアメリカ空軍による空爆で廃墟と化した旧陸軍大阪造兵廠跡で、その「七割」を在日コリアンとする鉄屑泥棒集団Ⅱアパッチ族が出没し鉄屑を盗むという事件が起きる。その事件から三十六年後の一九九四年、当時アパッチ族の一員だった経験をもとに梁石日は『夜を賭けて』（一九九四・十二、NHK出版、以下本文引用は一九九七・九、幻冬舎文庫）を書き上げる。そして、同年三月末、舞台は韓国。三月十九日に軍事境界線の板門店で開かれた南北実務者協議の席での、北朝鮮団長・朴英洙の「戦争が起きれば、ソウルは火の海になるだろう」という発言が引き金となり、朝鮮半島に「有事」ありと判断したアメリカは、在韓米軍基地に以下のものを配置する。

在韓米軍への戦闘ヘリコプター「アパッチ」の配備が三月末から始まり、北朝鮮が強く反発していた地对空ミサイル

・パトリオットも今月末までに配備完了の見通しだ。いずれも湾岸戦争で活躍した米軍のトラの子兵器である。（中略）これは一方で極秘とされてきた米韓連合軍の「新戦略五〇二七」の存在をあぶり出した。米韓両軍は、北朝鮮が侵攻すれば本格的な「防衛的攻勢」に出て、ソウル北方で北朝鮮軍を撃滅、北進に転じて平壤を占領、統一を目指す。

（中略）しかし「平和統一」を標ぼうする韓国が、北朝鮮の侵攻を前提としながらも、軍事力による吸収統一まで想定していた事実は、驚きだった。（朝日新聞）一九九四・四・一九

北朝鮮の「ソウルは火の海」発言が現前化させた問題は、「平和統一」を標榜する米韓連合軍が実は「防衛的攻勢」による武力統一作戦・「新戦略五〇二七」を構想していたことである。そして、その時、「新戦略五〇二七」を遂行するために配置されたのが戦闘ヘリコプター「アパッチ」である。「地对空ミサイル・パトリオット」同様、「アパッチ」も湾岸戦争で活躍した「米軍のトラの子兵器」である。夜間作戦や悪天候時にディスプレイに視界を表示するシステムやそれらの機能が統合されたヘルメット、そしてレーザー・ジャマーを搭載した「アパッチ」が神出鬼没にイラクのレーダー施設や最重要破壊目標陣地、戦車や装甲車を破壊していく勇猛果敢な姿は、当時のメディアがリアルタイムで伝えることで一気にその名を全世界に轟かせた。そして、三年後、その勇猛果敢な「アパッチ」が韓国に配

置されたのである。ここで注意しているのは、「アパッチ」の由来である。そもそも、「アパッチ」は『夜を賭けて』にも書かれているように、「白人」に土地を奪われたインディアン・アパッチ族のことである。アパッチ族の戦いぶりは神出鬼没で凶悪でありながらも、そこには「抑圧された民族」の戦いの意味があつた。しかし、湾岸戦争や韓国に配置される「アパッチ」からは、「抑圧された民族」の戦いの側面は抜け落ち神出鬼没で勇猛果敢な戦いぶりだけが前景化されている。さらに、興味深いことは、侵略者「白人」本人であるアメリカが、かつて被侵略者だつたはずの「アパッチ」を名乗っていることだ。この転倒を可能にしたのは、積極的な読み換えである。すなわち、アパッチ族から神出鬼没で勇猛果敢な戦いぶりを積極的に誤読することから、アメリカは「アパッチ」を名乗れたのである。そして、韓国の場合、その積極的な読み換えを支えた大義名分が、朝鮮半島の「平和」や「平和統一」だつたのである。

同時代に、「平和統一」の名のもと、韓国に配置された「アパッチ」を経由して『夜を賭けて』を眺めると、小説の最後で「ワン・コリア」の名のもと、「ハナ（ひとつ）！ ハナ！ ハナ！」と合唱するエピローグは異様に映る。第三部に当たる「十三」章は「ワン・コリア・フェスティバル」場面である。

作品の中で「ワン・コリア・フェスティバル」は「今年で九回目である」という記述から、一九九三年度のフェスティバルであることが分かる。梁石日をモデルにした張有真（職業も作家）は、大阪「朝日テレビ」出演のため大阪に行き、元アパッチ族

の一員だつた「金聖哲」（詩人の金時鐘がモデル）の妻Ⅱ「美花」が経営する居酒屋で、偶然、フェスティバルの実行委員である「姜信基」（フェスティバル実行委員長の鄭甲寿がモデル）に遭遇することになる。二人は「東京で一、二度」会つたことがあつたらしく、姜信基から「張さん、しばらくです」と声をかけられる。ところが、張有真は「曖昧な返事」で「久しぶりやね」とは答えるものの、相手が誰なのかを思い出せない。しかし、「美花」から「姜信基さんはな、在日のいろんな運動にかかわつてて、明日も大阪城公園で『ワン・コリア・フェスティバル』いうコンサートの実行委員をやつてはるねん」と説明されて、やっと、「先月、東京の出版パーティ」でフェスティバルの「パンフレットと招待券」をもらったことは思い出す。ここで注目したいことは、張有真が姜信基や「ワン・コリア・フェスティバル」を前にして構えるよそよそしさである。ちなみに、鄭甲寿は作品における梁石日との出会いは「まったく覚えてない」（金守珍・小林恭二・鄭甲寿「終わりのなき始まりを踏み出す力」、『ユリイカ』二〇〇〇・十二、一五七頁）と語っている。そして、「ばつの悪そうな表情」でフェスティバルの参加を約束する張有真の姿からは、今までフェスティバルとは全く関係がなかったかのような印象を受ける。

ところが、である。梁石日は一九九二年度のフェスティバルの時、「ワンコリアフェスティバルによせて」（賛同のメッセージ）
<http://hana.wonokorea.com/history/histv/8th92/vol1Mess92/vol1Mess92a.html>）という文章を寄せているし、『夜を賭けて』が出版さ

れた一九九四年にも「共に生きる」(ONKOREA ワンコリアフェスティバル十周年記念出版)一九九四・十、東方出版)というエッセイを書いている。大阪のテレビ出演は、「タクシー運転手の経験者である張有真」が「タクシー運転手の本を出版」したことから依頼されたのであるが、「夜を賭けて」の同時代の読者であれば、「タクシーの運転手の経験者」で「タクシー運転手の本を出版」した人が誰なのかはすぐ分かるだろう。このように同時代の読者であれば張有真のモデルが誰なのかはつきり分かる書き方をしている反面、フェスティバルの場面では全くよそよそしく構える描写になっている。さらに、張有真はテレビ出演後、「二時間近く」も早く大阪城公園に着く。そして、公園の入り口で姜信基に「ばったり出くわ」し、姜信基から「野外ステージ」やフェスティバルの説明を受ける。その後、張有真は「高く聳える大阪城を背景に美しく整備されている広大な公園」に「目を見張り、この公園が「戦前、東洋一の兵器工場」だったこと、そしてアパッチ族が存在したことを「知ってるか」と訊ねる。ところが、姜信基は、

「いいえ、知りません。いつ頃の話ですか」

「いまから三十……五年ほど前かな」

「ぼくは三十歳ですから、ぼくの生れる五年も前の話ですか。それ、わかりませんわ」

姜信基はわからないのが当然のような表情で笑って見せた。

「そうやろなあ」

張有真は感慨深げに大阪城を見上げ、煙草に火をつけて一服ふかした。

「ここは禁煙なんですけど」

と姜信基に注意された。

「あ、そう」

張有真は煙草の火を消して吸殻をポケットに入れた。(五〇六―五〇七頁)

とあるように、張有真の質問に姜信基はあつさり「それ、わかりませんわ」と答えている。さらに、そのよそよそしさは大阪城公園で再会した金義夫と張有真が、「ワン・コリア・フェスティバル」を眺める場所とも関係している。「二千人ほどの観衆で埋めつくされた野外ステージを二人は遠くから眺めた」(五三〇頁)と描写されているように、張有真は「ワン・コリア・フェスティバル」との距離を意図的に「遠く」構えている。

本稿の目的は、第三部の「ワン・コリア・フェスティバル」場面が、どのように表象されているのかを問うことで「ハナ」の位相を明らかにすることである。具体的な作業としては、まず、先行研究における主として第三部に対する二つの評価に注目し、その評価を可能にした解釈の枠組みを明らかにする。次に、その評価軸には包摂されない解釈を同時代のフェスティバルをめぐる言説と照らし合わせながら考察する。そして、北朝鮮への帰国運動場面における社会主義建設という論理Ⅱ「ハナ」

が、時に排斥の論理としても機能することを第三部に軸足を置きながら論証する。

II 「反」ナシヨナリズムの死角

以下、引用する文章は「ワン・コリア・フェスティバル」が開かれる大阪城公園で三十五年ぶりに再会した張有真と金義夫が、「真実」の解釈をめぐる対立する場面である。先行研究の殆どが共通して引用している金義夫の台詞である。

「(前略) 真実なんてものは時間がたてばたつほどわからなくなってくる。しかも膨大な犠牲をとまなうものや。日本は戦後五十年近くほおかぶりしてきて、いまになつて証拠を見せろ、とか何とか言うて開き直つてるやないか。生き証人がいてもやらせや言うて、とりあつかおうとせん。そのうち生き証人も歳をとつていなくなつてしまふ。どこに真実があるねん。いま暴かなあかんのや」(五二六―五二七頁)

「大村収容所も来年取り壊されてなくなるらしい。それで大村収容所も存在しなかつたということになるわけや」(五三二頁)

右の文章が興味深いのは、文章それ自体ではなく、『夜を賭けて』を論じる先行研究の枠組みが浮上してくることである。

たとえば、宮沢剛(「梁石日「夜を賭けて」論―想像力の国境線は超えられるか―」、『日本近代文学』二〇〇一・五)は、大村収容所を語る「登場人物の言葉や語り手のスタンス」が「しばしば登場する収容所の警備官や係官の内面を決して語ろうとはしない」ものと指摘しつつも、そのような語り口を批判的に捉えることなく、むしろ「他者の(声)が聞こえているにもかかわらず、他者の(声)を意義あるものとして受けとめ」なかつた「収容者側の人間」―「日本人」を批判的かつ反省的に受けとめる。そして、右で語られる金義夫の「苛立ちや不信心」を真摯に受け止め、「私(たち)」―「日本人読者」に「金義夫の間に合わなかつた聞き手になる」(傍点、原文のまま)ことを勧める。つまり、宮沢剛が『夜を賭けて』を論じる枠組みは、日本的「法」―「想像力の国境線」に守られ「他者」を想定しない日本のナシヨナリズムを批判するものであり、その立場からして、日本的「想像力の国境線」に揺さぶりをかける金義夫の「苛立ちや不信心」は、「極めて有効な表現方法」として評価されることになる。そして、このような解釈や評価は、『夜を賭けて』の創作意図を語る梁石日の次の文章とストレートに結びつく。

『日本三文オペラ』はおそらく開高健の傑作の一つであり、日本文学の中でも特異な位置を占める作品だろう。(中略)ただ一つ加えておくが、『日本三文オペラ』を読んだアパッチ部落の者はきわめて不快感をあらわにしたのだ。なぜなら、そこに描かれているのは等身大の在日朝鮮人で

はなかつたからだ。日本の小説や映画などにとどき登場する在日朝鮮人像は突飛で不自然であり、実在性に欠けるところがあるが、在日朝鮮人に対する日本の理解はいまなおあまり変わっていないといえる。このことが私にアパッチ部落の小説を書かせる要因となっている。実体験にもとづいて、生きる闘いが在日朝鮮人にとつてどのようなものであったかを証したかったのである。（『夜を賭けて』を書き終えて、「新刊ニュース」一九九五・三、引用は「闇の想像力」一九九五・五、解放出版社、一三〇―一三二頁）

「いまなおあまり変わっていない」「在日朝鮮人に対する日本の理解を是正するために書いたとする梁石日の創作意図からすれば、『夜を賭けて』から日本的「想像力の国境線」の限界を読み取り批判する宮沢剛は理想的な読者と言えるだろう。

しかし、右に引用した金義夫の「苛立ちや不信感」を吐露する文章も、読む人によつては全く違う解釈が生まれる。たとえば、朴裕河「共謀する表象3―開高健・小松左京・梁石日の「アパッチ」小説をめぐる一」(『ナショナル・アイデンティティとジェンダー』二〇〇七・七、クレイン)。朴裕河は「周辺化された存在による他者の周辺化が、自己を優位におく自己表象をまぬがれない」という「表象」の原理」を援用しつつ、金義夫が「戦後日本」を一貫して否定的に評価する表象の力」は「アパッチ」の罪」を無化、「朝鮮」や「在日」は、その被害性ゆえに「正義」という場所を特権的に」(三五頁)獲得すると批判的に論

じる。そして、この後、朴裕河は「しかし」「警察」も「看守」も監視と逮捕が仕事である以上、彼らは自分の職務にふさわしいと思われる表情と態度を取るほかないはずである」と理解を示す。これは宮沢剛が小説の中で大村収容所を語る「登場人物の言葉や語り手のスタンス」の偏向さを指摘しつつも、そのような語り口を批判することなく、むしろ日本的「想像力の国境線」の限界を批判した態度と表裏一体をなしている。すなわち、朴裕河は「朝鮮」「在日」の「想像力の国境線」「表象」の限界を批判的かつ反省的に論じているのである。

朴裕河同様、「在日」「朝鮮」の側から、表象の偏向さを問題にしながらもやや違うスタンスを取っているのは、李建志「梁石日の読まれ方―「在日朝鮮人文学」という「外地」」(『朝鮮近代文学とナショナリズム』二〇〇七・九、作品社)である。李建志は「アパッチ部落」の生活や、大村収容所との対決、そして北朝鮮帰国運動とその幻想の崩壊」などの歴史を「こういう痛みをいまもうけ続けているのだといわんばかりの文章」、すなわち「説明口調の「告発文」は「いつたいたいという意味があるというのだからか」(五六―五七頁)と手厳しく批判する。李建志が『夜を賭けて』を批判する根拠は、彼の名前・「李建志」からも理解できる。朝鮮風の名前・「李建志」でありながら「イ・ゴンジ」とはなのらず、日本人風の名前・「けんじ」でありながら朝鮮風の名前・「李建志」を持つ李建志は、日本か朝鮮かではなく日韓両国の「体制への違和感提示」を名前に込めている(「序章」の注「九」、三四頁)。李建志が本の「あとがき」で

「抵抗のナシヨナリズム」ということばを使つて、安易に自分を救済してはならない（二五四頁）と語つていることからするならば、在日の「痛み」を売り物にする梁石日が在日の「新しい」文学として評価されることに「違和感」を感じたのではあるまいか。

論者も李建志のスタンスには共感できるが、しかし、『夜を賭けて』を論じながら「こういう痛みをいまもうけ続けているのだといわんばかりの文章」に「いったいどういう意味があるというのだろうか」とまで言い切る文章には、やはり、ある「違和感」を感じざるを得ない。その「違和感」とは、『夜を賭けて』を批判する李建志の語り口があまりにも「告発文」的であることだ。言い換えるならば、「抵抗のナシヨナリズム」批判」という枠組みに包摂できる「意味」以外には、「いったいどういう意味があるのだろうか」とする厳格主義的態度は、それ自身が「告発文」的で「権力」的であることだ。「抵抗のナシヨナリズム」批判」という枠組みは一つの解釈装置であり、だからこそ常に死角を抱え込むものでもある。

つまり、金義夫が「苛立ちや不信任」を吐露する文章が前景化する問題は、右の三者が「反」ナシヨナリズムという同じ枠組みを共有していることである。宮沢剛と朴裕河は「日本」と「朝鮮」に差異の線を走らせ、それぞれの立場から「想像力の国境線」＝「表象」の限界を強調するのに対して、李建志は「朝鮮」や「在日」内部に差異の線を走らせ、「抵抗のナシヨナリズム」を厳しく取り締まる。しかし、三者が用いる「反」ナシ

ヨナリズムの力学からは、なぜ、時空間を越えた第三部、すなわち一九九三年の「ワン・コリア・フェスティバル」場面が挿入されなければならぬのかを考えることは出来ない。それは単なる三者の認識不足として片付けられる問題ではない。そうではなく、「反」ナシヨナリズムの枠組みそれ自体がそれ以外の解釈を寄せ付けないからと考えるべきである。それでは、次は「こういう痛みをいまもうけ続けているのだといわんばかりの文章」（李建志）と、同時代のフェスティバル言説とを照らし合わせながら新しい「意味」の提示を試みる。

Ⅲ テーマソング「ハナの想い」

先行研究の解釈の枠組みを確認した上で、もう一度、第三部に注目してみると先行研究の殆どが金義夫の「苛立ちや不信任」しか引用していないことに気づく。それは「反」ナシヨナリズムをめぐる解釈の枠組みの文脈上、金義夫の「苛立ちや不信任」さえ示しておけば事足りたからかも知れない。しかし、次のエピソードはどうだろうか。

「大村収容所も来年取り壊されてなくなるらしい。それで大村収容所も存在しなかったということになるわけや」皮肉とも諦めともつかない溜め息まじりの声だった。そのとき野外ステージから（ひとつ）という意味の韓国語の合唱が響いてきた。

「ハナ(ひとつ)！ ハナ！ ハナ！」

その合唱は大きな渦となつてあたりを圧倒し、夕闇の空にこだました。(五三二―五三三頁)

金義夫の「皮肉とも諦めともつかない溜め息」の後、いきなり、「ハナ」の合唱が鳴り響く。小説の中でフェスティバル「ワン・コリア」という名称は、「韓国系」と「朝鮮系」に分裂されている。「在日の困難な政治状況」が反映した結果と説明されていることから、エピソードの「ハナ」の合唱を在日の「被害性」(朴裕河)・「痛み」(李建志)を強調する文章とも解釈できる。

しかし、実は、金義夫の「皮肉とも諦めともつかない溜め息」の後に「ハナ」の合唱を歌い上げるのは、他でもない金義夫の「次男」である。そもそも、第三部で金義夫が張有真と再会できたのは、「次男」がフェスティバルを手伝っていたからである。ところが、その「次男」と金義夫はある対立関係にある。

対立の理由は、「八年前」に親の反対を押し切つて北朝鮮に帰国したまま死んだ「長男の二の舞」を「次男」が繰り返そうとしているからだ。つまり、当の「次男」は金義夫の「絶対反対」にもかかわらず、「韓国」留学を執行しようとしているわけである。そうすると、第三部は単なる日本／朝鮮の図式だけではなく、金義夫／「次男」、張有真／姜信基、金義夫／張有真の關係から、もう一度、読み直す必要がある。アパッチ族のことなど「そら、わかりませんわ」と答える姜信基と「次男」に通有している連結項は、言うまでもなく「ワン・コリア・フェス

ティバル」である。

それでは、父の「絶対反対」にもかかわらずそれにめげず「韓国」留学を執行しようとしている「次男」の根拠、すなわち「ハナ」という思想・運動はいかなるものであるのか。梁石日は小説の中で「(ひとつ)」という意味の韓国語の合唱」の題名を伏せているが、実は、これはフェスティバルのテーマソング「ハナの想い」である。作詞は在日二世の康珍化^{カンジンファ}である。康珍化は、一九五三年、静岡県生まれで、早稲田大学文学部を卒業して一九七八年に山下久美子「バスルームから愛をこめて」で作詞活動を開始。その後、一九八四年には高橋真梨子「桃色吐息」で日本レコード大賞作詞賞を受賞する等、数多くの名曲の作詞を手がけている(ギザギザハートの子守唄、アニメ「タッチ」の主題歌など)。「ハナの想い」の歌詞はフェスティバル第五回目の一九八九年に作詞され、第八回目の一九九二年三月二十五日に日本と韓国で同時にCDが発売されている。作曲は吉屋潤で歌手は林珠里^{ハルシメ}である。康珍化は、テーマソングの作詞依頼を引き受けた理由について次のように書いている。

作詞の依頼を受けた時に、すぐに創ろうと思いました。ワンコリアフェスティバルには賛同していましたし、とくにフェスティバルが政治的でないところと、民族や統一に関する主張もステレオタイプではない新鮮さに共感を持っていましたから。詞自体もすぐに出来ました。ハナから花を連想し、そこから種を、種から枝や森へと自然に連想が広

がり、詞が出来上がったわけです。詞を創ろうと思った時、もう一つ思い浮かんだのがジョン・レノンの『イマジジン』でした。目をつぶると国境のない平和な世界の光景が見えるような歌です。『ハナの想い』にもそうした想いが込められています。(康珍化さんへのインタビュー) <http://hana.wonkorea.com/history/hist/8th92/hanaomoi.html>

康珍化はフェスティバルに賛同した理由について、「政治的でなく」民族と統一に関する主張もステレオタイプではない」と述べている。「ワンコリアフェスティバル」を立ち上げた実行委員長の鄭甲寿（ちよんがす）（姜信基のモデル）によると、当のフェスティバルは一九八五年に「朝鮮が日本の植民地支配から解放された」「光復」四〇周年を機に、在日コリアンの立場から、統一への歴史の新たな展望を切り開こうと訴え、始められたもの」で、発足当時の名称は「八・十五（四〇）民族・未来・創造フェスティバル」（ワンコリア・フェスティバルとは何か、「環二〇〇五・秋、三二二頁）であった。大学の時、「統一運動や反差別運動、政治的な運動」などに参加した経験を持つ鄭甲寿は、それらの運動には「過去の反省や批判、現状に対する分析や抗議」はあるものの、「実現可能な未来像やそこに至るシミュレーション」が極めて少なかったことから、「未来」と「創造」を強調する意味をこめて命名したと述べている。ところが、第一回目、第二回目（一九八六年）のフェスティバルは、「当事者である在日コリアン自らが立ちあがり、それに祖国も呼応するという構図」

で「統一の意義をできるだけ現実的に語ろう」としたが、参加者は「出演者やスタッフなど関係者の方が多いような」「悲惨な出発」と言うべきものになってしまった。その結果、鄭甲寿は「統一は理想そのものであっていい」と「悩みながらも開き直り」、第三回目（一九八七年）からは「ワンコリアを理想論たとか、ユートピアだとかいう人もいます。しかし、理想無き民族、国家がどうして世界の尊敬を得られるでしょうか。（中略）イデオロギーの対立を超えた新しい社会を創造するワンコリアは、世界に新しい理想を示すでありましょう」（ワンコリア・フェスティバルとは何か「前同、三二四頁）と方向転換する。ちょうど、その方向転換と軌を一にして誕生したのが、「ワンコリアフェスティバル」のテーマソング「ハナの想い」である。

「ハナの想い」の誕生秘話が興味深いのは、作詞の具体的なイメージとしてジョン・レノンの「イマジジン」を連想していたことである。長く尾を引いたベトナム戦争がまだ終わらない一九七一年十月に発売された「イマジジン」は、「宗教」「国境」「所有」など、そもそも存在しないことを「想像してごらん」と呼びかける平和運動・反戦歌の代名詞である。次に引用するのは「イマジジン」と「ハナの想い」のサビの部分である。

僕を空想家だと思うかも知れない／だけど 僕ひとりじゃ
ないはずさ／いつの日か きみも僕らに加われば／この世
界はひとつに結ばれるんだ（「イマジジン」、『決定盤 ジョン・レ
ノン』二〇〇五・九・三十、東芝EMI、対訳は山本安見）

言葉でうまく 言えない気持ち／だけど瞳は 待ちつづける／祈り続けた 夢がいつか／遠い場所から 帰って来る日を／ひとつのものを ひとつのままに／ハナ ハナ ハナ／ふたつのものは よりそうように／ハナ ハナ ハナ（「ハナの想」 <http://hana.wonokorea.com/history/hist/5th89/hanaSong.html>、ちなみに一九九四年出版の『ON E K O R E A』（前同）には、「ハナ ハナ ハナ」が「ハナ ハナ ハナロ」に変更されている。「ロ」は名詞につく副詞格助詞で限定の「に」を意味する）

ジョン・レノン「イマジン」の「いつの日か きみも僕らに加われば」は「ふたつのものは／よりそうように」と対応、そして「この世界はひとつに結ばれるんだ」は「ハナ ハナ ハナ」と対応していることは容易に確認できる。しかし、問題は歌詞の上での類似点だけではなく、フェスティバルのあり方とも深く関わっていることだ。たとえば、「イマジン」の中で使われている「空想家」という言葉は、先に引用した「ワンコリア フェスティバル」の「ビジョン」を語る鄭甲寿の「主旨文」（一九八七年度）にもみられる。そして、その方向転換を語る鄭甲寿の「主旨文」が興味深いのは、「理想論」や「ユートピア」を口にしながら、そのモデルに「アメリカ」の名をさりげなく出していったことだ。先に引用した文章では「中略」になっているが、もともとは「たとえば、アメリカは、誰でも努力すれば成功する自由の国という理想を掲げて、たとえそれがユートピ

アでも世界中からあらゆる民族を引き寄せ、そのバイタリティーとパワーによってわずかに二〇〇年で世界一の大国となりました」（私達はワンコリアへのビジョンを提言します」 <http://hana.wonokorea.com/history/MP/1987MP.html>）となっていた。鄭甲寿は「世界中からあらゆる民族を引き寄せ」る「バイタリティーとパワー」をアメリカの「自由の国という理想」ゆえであると書いているが、その「自由の国という理想」という美辞麗句の名のもとで如何なる「現実的」「政治的」問題が起こりつつあるかは書かない。勿論、鄭甲寿がそれを知らないはずがない。そうではなく、「現実的」「政治的」部分を出しすぎるとお客さんにウケが悪く、場合によっては「悲惨な出発」の時に逆戻りするかも知れないことをよく熟知しているからに他ならない。

以上の、フェスティバルの方針の方向転換やテーマソング「ハナの想い」のあり方を参照しながら金義夫と「次男」の対立関係を眺めてみると、そこには互いにけつして折り合わせることも出来ない分有不可能性が露呈していることが分かる。金義夫が「次男」の「韓国」留学を「絶対反対」する根拠は、「民主化が多少進んだいうても、韓国はまだ危ない」（五二七頁）という「政治的」「現実的」状況判断からである。同時代の読者なら金義夫の状況判断から、一九七一年に韓国に留学し「北のスパイ」として逮捕され十九年間の獄中生活の後、一九九〇年に奇跡的に釈放された徐勝（ソウサン）を連想するかも知れない。ちなみに、『夜を賭けて』が出版された同年に本人による手記『獄中一九年』（一九九四・七、岩波書店）も出版されている。そして、金義

夫の「絶対反対」に対し、「次男」が「政治的」「現実的」側面抜き「自由の国という理想」論を骨格にした「ハナ」で答える時、同時代の読者は来日した韓国の金泳三大統領が「互いの過去の歴史は、抑圧した側、された側双方にとって恥であるという部分があるが、こういう過去に、もはや拘泥することなく、未来志向に両国関係を持つていかなければならない」（日韓首脳会談の要旨）、「朝日新聞」一九九四・三・二五」と繰り返し「未来志向」を強調した発言を連想するかも知れない。同時代の韓国をめぐる二つのイメージとも遠くで響き合う第三部は、まさに、分有不可能性を露呈したものであり、「ハナ」をめぐって拮抗する諸関係を描き出している。それも、「対外的というより、ウエイト的には対内的」にである。最後の言葉は金時鐘の言葉である。

第三部が、何故、「ワン・コリア・フェスティバル」の場面なのかを考える時、『夜を賭けて』が出版される半年前（一九九四年七月）に行われた金時鐘との対談「共生の思想は可能か」（『闇の想像力』所収、前同）は興味深い。対談の中で梁石日は、「今度の小説『夜を賭けて』に言及しつつ大村收容所問題に触れ「今年（一九九四年）中に無くなるんだって。そうすると、大村收容所などは存在しなかつたと、こういうことになってくるわけ」（二二三頁）と語る。これは小説のエピソードでもそのまま反復される台詞であるが、この後、二人の話題は「大村收容所を廃止させるための雑誌」・『朝鮮』（朝鮮人の間違い、論者注）の「社会参与」の意味などを経て、「共生の思想」へと移る。金時鐘

は「護憲勢力として、日本の大多数の体制批判勢力」だった「社会党」が、政権を握った瞬間（一九九四年六月三十日に村山内閣誕生）、自衛隊は合憲だと立場を翻した事態を例に挙げ、「つまり、共生の思想という時、共生できないものも浮かび上がらせなければならぬ」と力説する。それに対して梁石日は「だけど、やはり、共生していくという前提で考えないことには具合悪い」と答えるものの、金時鐘はその時「どの部分で共生できるか」が大事だと微調整しながら、金嬉老事件を引き合いに出す。金嬉老が寸又峽に立て籠もった時、「総連は、民族として、同胞として恥ずかしいやつだから、それ（金嬉老、論者注）を支援することに一切手を貸すことはならないという御触れを出した」と金時鐘は言う。そして、その時、金時鐘は総連に「不信というより空白」が生じたと語る。それは、金嬉老を「恥さらしの奴」として同胞から切り捨てたからである。その後、金時鐘は次のように語る。

金嬉老事件が起きた時、戦後二十六年経っていた。二十六年経つてもなお国を統一させ得なかった本国の南北の人たちの責任、そして私なら私の責任があつて、日本での置いてきぼりの生活の中で、朝鮮人を表に出さずに生きてきたああいうはみだし者が生じているわけだ。だから、私たちが共生と言うとき、相容れないものとの繋がりをどうするかということが基本的なテーマだと思ふね。ただ、相容れないというのは異質さのためではなくて、同質であつても

なお相容れない思想は蔓延していくこともあるからね。(二
一七頁)

「共生」とは、「異質な人と共同して生活していこう」みたいな「アットホーム」的なものではそもそもなく、「私の生活を左右する」ような「出来上がった権威」・「権力」への「根のところで猛烈な反権力の思想」である。だから「根のところぎりぎり」で譲れないものが何かを見極めないと必ずしつべ返しを食らうことになる。金時鐘は説く。そして、その時、「異質」なものだけでなく「同質」なもの、すなわち「対外的というより、ウエイト的には対内的なものが大きい」と強調する。出版半年前の金時鐘との対談と『夜を賭けて』との直接的な因果関係はさて置き、ここで確認しておきたいことは、二人の対談を参照することで輪郭のはっきりした問題点、つまり、『夜を賭けて』における「共生」＝「ハナ」できないこと(分有不可能なこと)とは何かという問題が見えてくることである。

第三部における分有不可能性、そのような関係の一つは言うまでもなく張有真と金義夫の関係だろう。第三部は張有真の「不思議な現象」から語り始められる。昼夜が逆転した生活をしている張有真は、家の「裏の銭湯の庭から燃料の材木を切るノコギリの凄まじい音」に悩まされ続けている。「一時は区役所に訴えようかと考えたこともあ」るくらいである。ところが、「そのうち不思議な現象が起こったのである。胸をかきむしられるような電気ノコギリの轟音が響いてくるとパブロフの

条件反射ではないが、急に眠くなる」のである。その理由は「とりとめのない考え」に拘泥している雑念を電気ノコギリの凄まじい轟音が払拭してくれる」からである。何故、わざわざ、このような「不思議な現象」を第三部の冒頭に持つてくるのか。それを、金義夫との対立関係の伏線として捉えるなら、次のような解釈が可能になる。金義夫は北朝鮮(総連)に二つの恨みを持つている。一つは「長男」のこと、そして、もう一つは「終戦後からずーっと組織に協力してきた」「叔父」が、ある日「突然」、何の理由もなく「修正主義」のレッテルを貼られたことである。この二つの恨みから金義夫は、「傷ついた人間はどないすんねん。誰が責任をとるんや。誰も責任をとろうとせん。そんな連中に統一をうんぬんする資格があると思うか」と張有真を睨みつける。次は張有真の内面描写である。

もちろん張有真にも言いたいことはいくらでもある。社会主義を信じていた者が社会主義の崩壊を目の当たりにして社会主義を批判するのはたやすいことであつた。だが、社会主義を信じていた自らを社会主義の崩壊によって無化することが許されるだろうか。(五二六頁)

張有真は金義夫の個人的な痛みや恨みを一端カッコに入れる。それから、「社会主義を信じていた自ら」の責任を問う。ここにこそ、張有真と金義夫の根っこからの対立関係がある。張有真には、社会主義を批判する金義夫の「何か言いたいこと

があれば言ってくれ、と言わんばかり」の口調が、「社会主義」の名のもと、それ以外の「何か」を絶対認めない社会主義の口調と全く同一のものとして映ったのである。「パブロフの条件反射」を身体化した張有真には、「責任」という言葉を連発しながらも「私なら私の責任」には一切触れることなく、「無条件反射」的に社会主義を批判する金義夫を素直に肯定出来なかつたのである。

それでは、張有真が「社会主義を信じていた自ら」の責任を指摘する時、それは具体的にどういう「問題」を指しているのだろうか。以下は「社会主義」＝「ハナ」の名のもと、「無条件反射」的に地上の樂園を目指して行動を一にした北朝鮮帰国運動場面を中心に、「社会主義を信じていた自ら」の責任問題について考えてみる。

IV 歴史の誤認と「更生の誓い」

まず、アパッチ族の生成と終焉をめぐる誤認された事実関係を確認しておく。アパッチ族活劇は「ある日の朝、七十歳になるヨドギ婆さんが市場籠をさげて、ふらふらとおぼつかない足どりで運河沿いを歩いて城東線の頭もつかえそうな低いガードをくぐり、百五十メートルほど先の弁天橋を渡って廃墟の中へ入って行った」（十六頁）ことから始まる。そして「ヨドギ婆さんの金属騒動から始まった警察とアパッチ族の八ヶ月にわたる熾烈な攻防戦はここに終結したのである」（三〇七頁）とあるよ

うに、アパッチ族活劇は一九五八年二月から十月までの「八ヶ月」間の出来事とある。ところが、当時の新聞を調べてみると意外な記事が目につく。

国鉄城東線をはさんで東、西に拡り城東区だけでも五十万平方メートル（約十三万坪）を有する旧陸軍造兵廠跡は戦後十余年いままお当時の空爆のままの残がいをさらけ出している。現在は国有財産として近畿財務局管財部杉山分室が管理しているというものあまり広いため手が届かず、加えて朝鮮事変以来の金ヘンブームで鉄道の絶好のかせぎ場所となつている。また横の空地には不法占拠した朝鮮人部落ができるなど、犯罪の温床地と化し管理、取締当局の財務局、府警、城東署でも全く手をやいており、付近の人はもちろん市民からも「何とかならぬか」という非難の声が集まつている。（「横行する泥棒や居座り」、「大阪日日新聞」一九五七・三・二十七）

一九五七年三月の段階でも、すでに「不法占拠した朝鮮人部落」による「鉄道口」に「手をやいて」いる様子を右の記事は伝えている。さらに「鉄道口」の「手口」については「①不法占拠している部落西側から国電鉄橋を越え侵入するルート②水道管架設橋をつたい侵入するルート③伝馬船で川づたいに侵入するルート」と伝えられているように、作品の中で警備の強化による打開策として方案された船による侵入は、すでに一年前

から行われていたのである。そして、「その名も」アパッチ（大阪日日新聞一九五八・五・二九）によると、一九五七年五月には「第一次一斉検挙」が行われて、一九五六年「暮」から一九五七年五月までに「二百名」が検挙された。

そして、もう一つ注目したいことは、アパッチの終結日である。作品の中では一九五八年「十月二十八日のK新聞」が引用され、「八ヶ月にわたる熾烈な攻防戦はここに終結した」とあるが、壊滅後の次の年である一九五九年には次のような記事が見られる。

昨年十月の一斉手入れで全滅状態にあった大阪東区山町旧陸軍造兵廠あとの鉄ドロ集団「アパッチ」がその後ふたたび勢力を回復、新年とともに連日約二百名が活躍しはじめたので、東署では十三日朝九時から同十一時まで多田署長以下八十六名が極秘裏に出動、警備艇なども出して水陸両用作戦を展開、計六十三名（うち二十五名女）を窃盗、軽犯罪法違反現行犯で検挙した。（「不死鳥？アパッチ族、大阪日日新聞」一九五九・一・十四）

アパッチ族は一九五八年十月に終結したのではなく、翌年にも「ふたたび勢力を回復」し「連日約二百名」が「不死鳥？」の如く「活躍」していたのである。そこで問うべきは、何故、「ふたたび勢力を回復」した「不死鳥？」を描かないのかである。この何故に単純に知らなかったからという答え方もありう

る。実際、梁石日は『夜を賭けて』を書き終えて」（「新刊ニュース」一九九五・三、引用は『闇の想像力』前同、一二九頁）の中で、「この小説は一九五八年二月頃からその年の十月頃まで、かつてアジア最大の兵器工場であった大阪造兵廠跡に埋蔵している鉄を夜な夜な発掘していた在日朝鮮人と警官隊との果てしない攻防戦を描いたものである」と真面目に書いているからである。しかし、作家の記憶違いという側面も視野に入れて考えると次の一連の記事は興味深い。

【大阪】三十日午後九時四十五分ごろ大阪城西側の元造兵廠跡広場（東区杉山町）で通称「アパッチ族」というクズ拾い十数人が鉄クズ類を集めているのを巡回中の東署警ら係、長沼静司巡査（三一）が見つけ、その一人を窃盗現行犯で捕えた。これを見た仲間七、八人は、スコップやツルハシをふるい「やってしまえ」と長岡巡査に襲いかかった。同巡査はおどしに一発ピストルを放ち、それでも相手がひるまないためさらに二発撃った。（「朝日新聞」一九五九・五・三一）

一九五九年の一斉手入れ後、アパッチ族に決定的な歯止めをかけたのは、警官のピストルによる二人のアパッチ族が負傷した事件である。一人は翌日死亡、もう一人は「背中をうち抜かれて一カ月の重傷」を負ったこの事件について、府警は「正当防衛」論を主張、それに対して朝鮮総連大阪府本部は府警の見

解は「まったくのデッチあげで、真相は虐殺である」と「府警の責任を追及する」（『朝日新聞』一九五九・六・三）方針を発表する。そして、この事件がキツカケとなり、一カ月後の七月「十日午後八時」にはアパッチ族の「自発的」な「更生の誓い」が「妙安寺」で行われることとなる。「アパッチの窃盗現行犯を逮捕した大阪府警東署長沼静巡査（三一）に取りもどそうと襲いかかつてピストルの威かく射撃を受け、二人が死傷した事件がきっかけとなり代表三十人が連名のうえ、十日の全員会議で「浄化決議文」を採択、転向を声明することになったもの」（『アパッチが集団転向』、『大阪日日新聞』一九五九・七・九）と伝えられている。ちなみに、同記事でもアパッチ族と警官隊の攻防戦は「八ヶ月」ではなく「二年來襲撃騒ぎ」と書かれている。ところが、「更生の誓い」から一週間後、「部落の浄化運動が始まった矢先の十五日、非更生者約二十人がまたも旧造兵廠跡を荒し、世間のきびしい批判の矢表に立っている」（『断ち切れぬ』鉄の魔力²、『大阪日日新聞』一九五九・七・十八）と報じられているように、「更生の誓い」をした後も一部のアパッチ族は「旧造兵廠跡を荒し」つづけていたのである。

ここで注意しているのは、この時からアパッチ族を語るカテゴリーが「真面目」な「更生者」と「異分子」の「非更生者」と分類されるということだ。そして、このような変化は作品の中にも、「穏健派」と「武闘派」に名を変えられ描かれている。一九五八年十月の壊滅前、「三回の手入れを受けたアパッチ部落は大きな打撃を受け」、その打開策のため「アパッチ部落

五大酋長は緊急会議」を開くこととなる。アパッチ族は「穏健派」と「武闘派」に別れ分裂寸前まで至るが、「武闘派」の努力で解散は引き止められる。ところが、警官隊が一九五八年「九月末頃からは連日連夜、大規模な攻勢をかけてくるとともに、「集落の子供たちが通っている学校の先生」をアパッチ部落に訪問させ「子供の勉強に悪影響を与えるので鉄泥棒をやめるよう呼びかけ」る「懐柔策」が取られるようになる。「子供の教育はアパッチ族の泣きどころ」であることから「ある程度、功を奏し」、「学校に通っている子供の親は廃墟に入るのをやめる。そして、その後、「残ったのは武闘派たち」だけとなる。

一九五八年「九月末」のことである。この「懐柔策」は、同時代の「更生者」（『『穏健派』が「更生の誓い」をした理由として「こどもが学校でアパッチといわれ、泣いて帰る」（『断ち切れぬ』鉄の魔力²、『大阪日日新聞』前同）と説明する同時代言説と一致している。しかし、ここで重要なのは、同事件を小説の中ではほぼ一年前に繰り上げていることである。それは何故か。

廃墟に入つて鉄塊を盗んでいた頃のアパッチ族は飢えた狼のように牙をむいて何ごとにも歯向かつていたが、壊滅後、北朝鮮への帰国が現実味をおびてきたため、アパッチ部落の雰囲気も一変していた。長い歳月を差別と屈辱と貧困の中で暮してきたアパッチ部落の者にとって、北朝鮮は輝ける希望の星だった。（三三六頁）

「北朝鮮への帰国が現実味をおびてきた」時、「長い歳月を差別と屈辱と貧困の中で暮してきたアパッチ部落の者」を「積極的に」帰国運動に参加させるためには、どうしても一九五九年七月では間に合わなかったのである。北朝鮮の「共和国赤十字団の金珠栄副団長の談話」が発表されたのは一九五八年「十二月十四日」、そして「朝鮮戦争祈念日」に「南朝鮮米軍即時撤去要求」と帰国促進の中央集会」が開かれるのは「一九五九年六月二十五日」である。一九五九年七月以後では間に合わないのである。

それでは、アパッチ族壊滅をほぼ一年も繰り上げることで書き込まれた北朝鮮への帰国運動場面は、どのように表象されているだろうか。

V 帰国運動と「ハナ」の両義性

北朝鮮帰国運動場面で興味深い人物は、「徳山の女房」である。『夜を賭けて』を読んだ読者なら「徳山」という名前から、間違いなく「ウンコ」をイメージするだろう。たとえば、作品の冒頭近く、アパッチ部落が初めて描写される場面である。「いまひとつ不思議なことは、姉の家の斜向かいにある共同便所から小肥りの徳山という頭の禿げた男がズボンをはきながら出てくるのである。そして張有真を見てにっこり笑い、「煙草一本くれへんか」と糞尿の臭いを漂わせて近づいてくるのだった」（十一頁）とあるように、「徳山」は「糞尿の臭い」「ふんぷん

たつ」人物として表象されている。そして、「徳山」の次の登場場面はまたも「共同便所」である。「ヨドギ婆さんから情報聞き出せなかった集落の人々は、自分たちであのダイアモンドのような金属を探し当てよう」と廢墟に入る。早く行きたい「徳山の女房」、しかし、只今、夫は「ウンコ」中。以下は二人の「押し問答」である。

徳山の女房が共同便所に入つてなかなか出てこない夫を急かせていた。

「いつまで便所に入つてるの。はよ行かんとみんなに先越されてしまうがな」

「ウンコくらいゆつくりさせてくれや」

と徳山が便所の中から答えている。

「あんたは一日に何べんウンコしたら気がすむの」

「ウンコしたいからするんや」

「あんたはご飯食べてウンコすることしか能がないのかいな」

「誰でもめし食つたらウンコするわい。ウンコして何が悪い」（二七頁）

「ウンコすることしか能がない」「徳山」は、部落の人たちからも「糞つたれ」と「馬鹿にされ」る存在である。そして「徳山の女房」は「うちのひとを糞つたれ呼ばわりせんといて下さい。そら、うちのひとは一日に何べんも便所へ行きませうけど、

それは腹の具合が悪いからです。病人を差別するんでつか」と「糞つたれ」の旦那を庇う滑稽な女房として描かれている。「ウンコ」が部落の不潔のメタファーとして用いられていることは容易に確認できる。さらに、「ウンコ」はそれ自体アパッチ部落そのものでもある。たとえば、「一九五八年の六月」、「廃墟に入る人間の数は日ごとに増えつづけ」「総勢四百人を越え」た時、「集落到五カ所しかない共同便所の肥溜はいつも満杯で、四百人もの排泄物を処理できないために、外部からきた者は川に向つて尻を突き出し、排泄物をたれ流していた。ただでさえ川底からメタンガスを噴出している臭いドブ川のいたるところにでっかい糞の塊が浮遊して悪臭ふんぷんたつ状態であつた」(一〇四頁)と描かれているように、アパッチ部落の変化と「ウンコ」表象は対をなしている。ところが、「徳山の女房」の負の表象は、北朝鮮への帰国運動を境に一変することとなる。「帰国運動に積極的に取り組んだ態度を評価されて大阪総連本部から支部夫人同盟の委員長に推挙された」「徳山の女房」は、「帰国者の歓送会」では帰国者を代表して「決議文」まで読み上げることになる。そして、「決議文」を読み上げた瞬間、「徳山の女房」は「惜しめない拍手」に包まれる。「惜しめない拍手」を巻き起こした理由は、読み上げられたその「決議文」が日本語ではなく「母国語」だつたからである。

北朝鮮への帰国運動は「一九五八年八月十一日、川崎に居住する在日朝鮮人」による北朝鮮の「金日成首相」への「集団帰国したい旨の手紙」がキッカケで始まり、翌年の「一九五九年

二月十三日の閣議で在日朝鮮人の帰国を認め」、帰国運動はさらに活発化する。そして、帰国運動が本格化するとともに浮上してくる問題の一つは、言語であつた。帰国希望者のために、総連の「傘下団体は朝鮮語や国情についての講習会を開くなど組織的な活動をしている」ものの、「日本生まれの日本育ちが多いので、ことばと文字を教えることが当面の最重要事」(「北鮮帰還の波紋」、『アサヒグラフ』一九五九・三・八、八一―九頁)だつたのである。たとえば、「幻灯」を使つた子供の講習会では、「半数」が日本の学校に在学していることから、「説明もまず朝鮮語でやり、あとで日本語で翻訳という仕かけ」が取られている。そして、「婦人の中には朝鮮人の夫をもつ日本人もいる 五〇年以上も日本に住みついた朝鮮人もいる どちらもはじめて覚える朝鮮語であり朝鮮文字である 大声をはりあげての発音練習や黒板の文字を写しとる筆の運びもけんめいだ」(十頁)と写真付で報じられているように、「はじめて覚える朝鮮語」学習は「日本生まれの日本育ちが多い」帰国希望者には至難の業であつた。ちなみに、一九五九年から一九八四年の間に日本から北朝鮮に渡つた人数は「九万三三四〇人」で、その内、「朝鮮人の夫をもつ日本人」女性の帰国者数は「統計資料によりばらつき」はあるものの、「一八〇〇名強」(青木敦子「帰国事業における「日本人妻」をめぐって」、『帰国運動とは何だつたのか』所収、二〇〇五

・五、平凡社、一三三頁)である。

ところで、右の記事で気づくのは、「母国語」学習の大変さを伝える記事が少しも暗くないことだ。「事実、どの集会でも

参加者は概して熱心に講師の説明に耳をかたむけている。すべて朝鮮語でしゃべる建前になっているようだが、話が熱中してくると、つい日本語がとびだして大笑いというユーモラスな風景も見られる（九頁）と報じられているように、そこには不安や焦りは一切見られない。そして、同時代言説にみられる明るさは、小説にもしっかりと書き込まれている。

読み書きのできない者のために、帰国するまでせめて自分の名前と簡単な算数くらいは身につけておく必要があるという組織の方針で夜間学校が充足した。この効果は絶大であった。はじめて自分の名前を書けるようになった喜びはたとえようがない。文字を知ることが認識を新たにすることであった。急に視界が開けて未知の世界に遭遇した。（三二頁）

「読み書きのできない者」が「はじめて自分の名前を書けるようになった喜び」は、「徳山の女房」の成長物語と対応している。「ウンコ」イメージだった「徳山の女房」は、「母国語」学習から「二カ月」後には「自分で報告書を書けるまで上達」、そしてその後は、例の「決議文」朗読である。「徳山の女房」の「決議文」朗読は「いささかきこちなかったが、夜間学校で習った母国語を使って徹夜で書いた決議文であった。とつとつと読み上げる声と言葉がむしろ心情的こもった決議文となって会場から惜しみない拍手が送られた」とある。「徳山の女房」

の「とつとつと読み上げる声と言葉」は、「むしろ」、その「とつとつ」故に「夜間学校」や母国への思いや期待を奮い立たせ、みんなを「ハナ」にさせる（「拍手」とは、二つのものを「ハナ」にする行為でもある）。ベネディクト・アンダーソンは「言語」の特徴について「想像の共同体を生み出し、かくして特定の連帯を構築する」（『増補 想像の共同体』一九九七・五、NTT出版、二二頁）と指摘しているが、まさに、帰国運動における「母国語」学習の役割は「北朝鮮」という「想像の共同体」を生み出し日本に在任する在日を「ハナ」＝「特定の連帯」とすることであった。しかし、問題は、「特定の連帯」意識が排斥の手段として作動してしまうことだ。アパッチ族壊滅後、「ほとんど」は北朝鮮への帰国を決心する。ところが、アパッチ族の元組長である「金康夫」（金義夫とは違う人物）を含む「四家族」だけが帰国に断固と反対する。その「金康夫」のところに「毎日近所の者や活動家」が訪ねて来ては、「何でやねん。何でこんな汚い最低の暮らしにしがみつくんや」、「こは所詮、他人の国です」、「子供の将来を考え」ても「われわれは金日成將軍の偉大な旗のもとに結集し、社会主義社会の偉大な建設を実現させねばなりません」、「われわれと一緒に帰りましょう。自分の国へ帰りましょう」と説得する。しかし、「金康夫」は「焼酎をぐつとあおつて若い活動家を見すえた」上で、次のように言い返す。

「わしは日本で生まれて日本で育ったんや。日本はわしの故郷みたいなもんや。それにはつきり言うけど、ここで生

きられんもんは、向こうへ行つても生きられん。わしはそう思う」(三五〇頁)

「資本主義とか社会主義とか、そんなものわしは知らん。わしはただ自分の力で生きていく。それだけや」(三五二頁)

北朝鮮への帰国運動は思想的に対立している「民団」だけではなく、日本生まれで日本育ちの「自分の力」を信じ日本に居残った「金康夫」的な主体をも排斥したのである。

それにしても、「金康夫」の語り口は、どこか見覚えがある。それは金義夫が、突然「修正主義」者扱いされた「叔父」を語る時である。金義夫は「叔父」を「自分の名前もろくに書けない叔父がマルクス主義とか社会主義の理念なんかわかるかいな。ただ白頭山の英雄金日成の恰好よさに惚れ込んで協力してきたのや」(傍点は論者、五二五頁)と庇うが、これはそのまま「金康夫」にも当てはまるものである。ただ、違うところは信じていたのが「金日成の恰好よさ」か「自分の力」か、だけなのである。そうすると、「社会主義を信じていた」金義夫が「社会主義の崩壊」後、自分を被害者の立場に固定し身内である「叔父」(または「長男」)を蹂躪した「社会主義」を批判する時、「パブプロフの条件反射」を身体化した張有真にとっては、やはり「だが」とマツタをかけるしかなかったはずである。なぜなら、金義夫は「叔父」や「長男」に関しては被害者だと言えるが、「金康夫」に対しては加害者であるからだ。金義夫は大村収容所の暴力を語る時は被害者たりうるものの、社会主義を語る時は加

害者になりうるのである。

以上、金義夫と張有真の分有不可能性を確認することで気づくことは、二人のうち誰にピントを合わせて読むかによって、小説の意味も変わってくる。小説を金義夫に合わせて読むと、金義夫と「次男」の対立関係が浮上り同時代の「ハナ」をめぐる位相の違いも明らかになる。そして、その時にかぎり、金義夫はつねに「被害者」として読者に迫ってくる。しかし、張有真に合わせて読むとどうだろうか。金義夫との分有不可能性から、「社会主義を信じていた自ら」の責任問題が浮上ってくる。その時、金義夫は「被害者」の座から「加害者」へと引きずりおろされることになる。第三部は、まさに、ちよつとした視線の動かし方から図が反転するルビンの壺とも言える。

それでは、最後に、張有真に合わせて「ハナ」の合唱を読むとどうなるだろうか。金義夫に合わせて読むかぎり「ハナ」の意味は、「政治的」「現実的」「側面抜き」の「自由の国という理想」論にしか見えない。それは金義夫の最後の台詞、「大村収容所も来年取り壊されてなくなるらしい。それで大村収容所も存在しなかったということになるわけや」という「皮肉とも諦めともつかない溜め息」に力点が置かれるからである。これだけなら、李建志が指摘しているように、「こういう痛みをいまもうけ続けているのだといわんばかりの文章」にも見えてくる。しかし、張有真に合わせて読む(第三部の語り手の位置は張有真に近い)と、最後の二行「その合唱は大きな渦となつてあたりを圧倒し、夕闇の空にこたえました」に力点が置かれることになる。「大き

な渦」、「あたりを圧倒」、「こだました」という表現からはある肯定のニュアンスが伝わってくる。勿論、それは無邪気な肯定というニュアンスではない。梁石日は、小説が出版された同年のフェスティバルに次のようなエッセイをよせている。

〈ワン〉とは一つであり、〈二つ〉とは〈ハナ〉であり、〈ハナ〉とは単に祖国統一だけを意味するのではなく、ちがいをちがいとして認め合い、共に生きるための内在肯定力であるとわたしは理解している。世代が違えば考え方や感性もちがうのは当然であつて、それを理由にわたしたちは自己を瞞着するようなことがあつてはならない。（共に生きる）、『ONEKOREA』前同、六三頁

「ハナ（ひとつ）！ ハナ！ ハナ！」とは、単なる「祖国統一」を意味しているだけではなく、「ちがいをちがいとして認め合う」「ハナ」でもある。梁石日は、このような二つの意味を持つ「ハナ」を「瞞着」することなく自覚することこそ、「共に生きるための内在肯定力」であると書いている。それはけつして「アットホーム」（単なる「祖国統一」）的なものではなく、「ちがい」＝「相容れないもの」を見極め吟味した後、そ

れから「認め合」う関係のことである。金義夫との対立関係の後、語り手は二人の内面について「何かしっくりしない感じだった。舌つ足らずでこちなく、もの足りない会話の節々に苦く懐かしい思いと、埋めることのできない時の流れに隔てられて、二人の胸中に不自然さが残っていた。それはこの現実に対するもどかしさであり、自分自身に対するもどかしさであつた」（五三二頁）と描写している。分有不可能性を身体化することは、「現実に対するもどかしさ」だけではなく「自分自身に対するもどかしさ」をも引き受けることである。

本稿の冒頭で引用した「アパッチ」の配置を伝える同記事には、「冷戦後の米国の軍産複合体が朝鮮半島を絶好の武器の販売先とみている」という「警戒論」が紹介されている。「平和統一」＝「ハナ」の名のもと、米韓連合軍が「ハナ」になる時、それは「朝鮮半島を絶好の武器の販売先」として引き受けることでもある。その時、「相容れないもの」＝分有不可能性とは何か。そして、いかに「認め合」うべきか。それを「対外的というより、ウエイト的には対内的なもの」に力点を置きながら考えること、それこそ『夜を賭けて』がわれわれ読者に問いかけている問題である。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年）